

## 第 30 号神奈川支部情報

「人のあかし 2014」公演

応援特集号

発行日 2014 年 3 月 26 日

< 発行者 > 撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部

< 連絡先 > 松山英司 TEL/FAX 046(871)4263

e-mail [kan.mat.hid@tbc.t-com.ne.jp](mailto:kan.mat.hid@tbc.t-com.ne.jp)

ホームページ <http://kanagawa.uketugu.org/>

### 3. 9神奈川証言集会報告

## 侵略戦争に参加した体験から、現代政治を憂う！

3 月 9 日に**かながわ県民センター305** で開催した「神奈川証言集会」は 60 人定員の会場に**実数で 70 人**が参加して、文字どおりのすし詰め状態で、熱気あふれる集会となりました。(市民活動フェア 2014 参加企画)

今回は、山西省での戦争体験者・松本栄好さん(91才)にあの侵略戦争の戦地でのご自身の体験を語っていただきました。**ナマの**

**戦争体験**を語っていただける方は、私たちの身の回りにほとんどおられなくなりました。安倍政権の急速な戦争体制構築の動きの中でたいへん貴重なお話を聞かせていただきました。

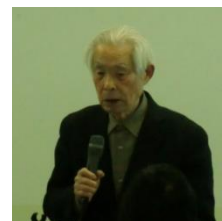
撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部が主催をして「神奈川証言集会」はこれまで 20 回を超えました。私たちの集会の目的、その核心は「撫順戦犯管理所管理所」と「太原戦犯管理所」に、そのキーワードがあります。

撫順と太原の戦犯管理所管理所で収容生活を体験してきた中帰連の人たちが自らの加害の実体験を語ることによって中国での侵略戦争の実相を明らかにしてこられました。

**刺突訓練**を命じられて初めは恐くて、足がすくんで震えあがっていた兵隊たちも、焼き尽くし、奪い尽くし、殺し尽くしたと言われる、「犯し尽くし」をふくめて「四光」という人もいますが、それほどの悪行の限りを尽くした「三光作戦」の中で、次第に「面白い」という感覚になり、英雄気分で“やりがい”を感じるようになったといいます。しかもこんな大変なことを、後に「忘れていた?!」と話す人もいたのです。

この真実を「人のあかし」という芝居で見事に演じてくれました。そのうえ大きな評判を呼んで再演することになりました。そこで、集会の第 1 部ではシナリオを書かれた和田庸子さんに「再び『人のあかし』の脚本を書いて考えたこと」を語っていただきました。話の中で、実際に演じる役者のド迫力朗読に、参加者一同大拍手でした。

再演の日程も詰まっていますので、今回の情報は『人のあかし』応援特集として編集しました。松本さんのお話は次回に整理したいと考えています。ぜひおおぜいの人に「人のあかし」を観劇していただきたいし、周囲の人に薦めていただきたいことをお願いします。



## 撫順戦犯管理所で何があったのか

### 再び「人のあかし」の脚本を書いて考えたこと

講演者： 脚本家 和田庸子さん

こんにちは、皆様の手元のプログラムにありますように、京浜協同劇団「人のあかし」の脚本を書いたことでここに呼んでくださったと思います。



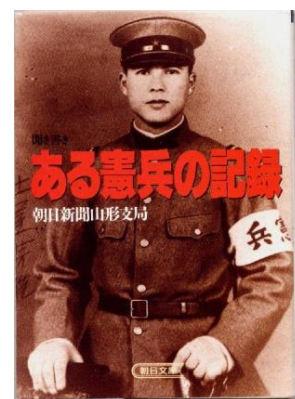
今回の再演にあたって、前回公演から1年余りの間に秘密保護法や、憲法の解釈替えによる集団的自衛権の行使の動き等がどんどん進んできてしまって、あのときの内容と同じことではやれないなと思いました。あつという間に戦争を絶対にしない国から戦争をする国に、あまりにも急速に進んでいるということを、皆さんと同じように私も強く感じています。そこでいくつかの点を改稿しながら、いま稽古を続けています。

今日は撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部の主催ですが、撫順について深く知っている方やそれほどでもない方等いろんな方がいらっしゃると思いますが、まったく知らないという方はいらっしゃいますか。・・・はい、いらっしゃいました。でもほとんどの方が撫順戦犯管理所のことや、撫順の奇蹟を受け継ぐ会に心を寄せてきてくださっているわけで、今日は私の後にお話しをされる、日本軍慰安婦の衛生兵としてたいへんなご体験をされた松本さんのお話しの前座ということで少し話させていただきますのでよろしくお願いします。

### キッカケは「ある憲兵の記録」(朝日新聞 山形支局)

私は、この脚本を書くことによってはじめて撫順戦犯管理所のことを知りました。皆様はとっくの昔からご存知で、こうして営々と証言集会等を重ねてこられました。私はほんの2年ほど前に撫順のことを知り、撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部の方々にいろいろなことを教えていただきながらなんとか脚本を書くことができました。

このお芝居の一番に軸となっているのは「ある憲兵の記録」という本で、朝日新聞山形支局の若い記者さんが30



年ほど前にまとめたものです。当時の山形県版に連載されました。

脚本は、この本の主人公・土屋芳雄さんの壮絶な生き方をタテ軸としています。戦後は土屋さんが各地で語って、2度とこのようなことが起こらないように、と証言をされ、手記に残されていったのですが、そのきっかけとなったのが撫順戦犯管理所だということがわかりました。その撫順戦犯管理所のあり方をヨコ軸として構成された演劇になっています。

土屋さんの生き方と、撫順戦犯管理所について知ったことは私にとっても本当によかったと思っています。

## 「自虐史観」に朗らかに向かい合う演劇

どのように、良かったのか。それについていくつか話してみたいと思います。

ここにお見せしますのは政府の広報です。最近のものです。みなさん、ご覧になったことがありますか「わたしのごぜんぞさまはわるいことをしたの?」「おかあさん、だからわたしはわるいにほんじんの?」と子供の質問を書いて「あなたは、お子さまにどう答えますか?」と問いかけています。下欄には「政府広報 日本の子供たちに本当の歴史を教えよう!」と書かれています。(「ごぜんぞさま」の誤字はご愛きょうでしょうか?)

私、本当にひどい!と思ったのです。

おじいちゃんが悪い人だったからその子供も孫も悪い日本人なのだから、その考え方じたいがまったく違いますよね。岸信介は満州で大変ひどい役割を果たしたわけですが、だから孫の安倍首相がわるいわけではないですよ。いま、安倍首相が行っている政策がたいへん悪いわけですよ。

おじいちゃんが悪かったから私たちも悪いという言い方、このような問いかけ方、ランドセルを背負った子供がまるでいじめられているような、この後ろ姿を「絵」として出したこと、そして「どう答えますか」と訊きながら「そうじゃないんだ!日本は悪くない!間違っていない!自虐史観が間違っている!」という主張を強調したいのですね。だが、よく見てみると自分たち自身がどんなに「自虐史観」にとらわれ、どんなに悪いことをしてきたかをわかっているからこそ、こんな言い方をするのですね。私は3日前にこれを見つけたのですが、なんてイヤらしい、陰湿な広告だろうと思いました。

(この「政府広報」はフェイスブックの投稿で見つけたものでしたが、あとでフェイクであることがわかりました。適切な例ではありませんでした。訂正します。どなたがどういう立場でつくったものかはつきりわかりませんが、フェ



イクとはいえ、「自虐史観」という歴史認識を見事に表現していると、改めて思います)

注・本物の「政府広報」でないことは判明しましたが、あまりにも見事に安倍政権のホンネを言い表していることから、和田講演の主旨は間違っていないと理解して編集者の判断で和田さんの発言通り掲載させていただきました。

私たちの劇団でやっていることの宣伝になりますが、こういう流れに真っ向から立ちむかって“そうじゃない！”と、**朗らかに言う**ことが今回の「人のあかし」の芝居だと思っています。

いま、図書館の「アンネの日記」が破られたり、「はだしのゲン」を撤去するとか、口をあけて「君が代」をちゃんと歌っているかどうかを確かめるとか、本当に人間としてやってはいけないことが堂々とまかり通っている時代だと思っています。憲法が変えられる前段の状態としてどんどんどんどんとやられています。こうしたなかで、自分たちができることはやろうと心から思っています。

このような証言集会はたいへん有意義だと思います。私たちの劇団も20数人の小さな劇団ですし、一回の公演で1000人足らずの観客規模の劇団ではありますが、こういう小さなことを一つひとつ積み上げていくことが大切だと思います。前は会場が川崎だけだったのですが、今回は横浜でもやらせていただく準備を進めています。

## 岩田豊雄（獅子文六）の戯曲「東は東」

いま中国との関係が尖閣の問題もあってたいへん緊張しているし、ヘイトスピーチなども行われています。私、たまたまある戯曲を読みました。獅子文六という作家がおられますよね。昭和28年に発表された作品なのですが、「東は東」という喜劇があります。中国人の夫と日本人の妻の間の夫婦喧嘩、夫婦関係を狂言風に書いたもので、べつに中国との関係を問題意識的に書こうとして書いたわけでもないのですが、なかなかおもしろい作品です。

たまたま日本に流れ着いた中国人の夫を奥さんの方は何とかして“日本式の夫”に仕立てあげたいと思っているいろいろ工夫するのです。夫が着ている中国服を脱がせて日本の小袖を着せようとするのです。だが夫はなかなか納得しないで抵抗するのです。そのくぐりで、奥さんの叔父さんにあたる人が奥さんに対してなだめる場面です。

妻の方は中国という国はどうしようもない国だ、というわけですがその叔父さんは、そんなことはない、中国の長い歴史を考えれば唐から来たものは日本にはたくさんあるのだ、およそものとして、もののはじめにある証拠はまず唐紙、唐金、唐錦、唐皮、唐切り、唐竹と言う・・・唐芋など、唐なす、唐獅子、唐おどり・・・と。その他天文、短筒、兵法などなど、賢いことはみんな唐人に学んだものじゃ、されば唐人には海山の恩がござるでおろそかにはなるまい、

小袖を着ぬと申さるるは道理でこそ。とういこととで奥さんの方を言い含める場面が書かれているのです。

中国との数千年の關係から考えれば、この間の数十年の日中關係はあまりにもひどいことだらけだけれど、それは日本の側の侵略がそうさせたことで本当の兩國の歴史は大いに影響しあつて進んできているのだということが獅子文六の短い戯曲の中に描かれています。私はやはり文化というものはすばらしいなあ、と思ひました。いつときの政治的な動向に右往左往されるのではなく、大きな視点で捉える文化とか文学が今ほど大事なときはないと思ひます。

### 「人のあかし」劇団内での議論を経て

今回の演劇についてですが、先ほど申しあげましたように二つの柱があります。この二つの柱は私自身が感動した柱でもあります。一つは土屋さんというモデルについてですが、土屋さんそのものを書いておられるわけではなく、想像して書いている部分もあるので、脚本では「渡部正一」となっています。その渡部の生き方が柱の一つです。ここで、その役をやる予定の役者にセリフを讀んでいただこうと思ひます。最初の部分だけ私が讀みます。

最初渡部正一が語ります。

渡部：だれだって自分がやった罪状を語るのは気が引けるべや。でも、ホントのことだもな。・・・私は戦争中、サッキ話した通りのことをしてきた人間なんです。

私は戦犯、戦争犯罪人だったのさ。死刑のなることもなく日本に帰れて、子や孫と暮らすことができました。・・・それに引きかえ、私に殺された人たちは生きかえることはない！ その親兄弟たちは生涯悲しみと怒りと苦しみの中で生きておる。隠しておいたんでは、私に殺された人たちは浮かばれねえべや。

あらためて思ふのよ。私は生まれたときから殺人鬼だったんだべか・・・って。・・・そうではありませぬ。そうではないのさ。

私がなんで鬼になり、鬼から人間にもどつたのか、そのことをどうしても聞いてもらわなければ死んでも死にきれないのどさ。

きょうは、私の話を聞きにきてくださってどうもありがとうございます。

こんなところからこの物語がはじまります。

土屋さんは徴兵検査を受けて甲種合格となり、軍隊に入つて満州へ渡つて最初に経験するのが刺突訓練でした。ここで鬼になる洗礼を受けます。そしてそのあとの憲兵としての凄まじい拷問の経験が加わつていくわけです。この二つの場面を演劇としてやるということについても劇団の中でもかなり議論がありました。

「いくらなんでも、残酷すぎる」「映画とかお話を聞くことだったらまだ耐え

られるだろう。だが目の前で・・・この場面は？」という意見がありました。しかも人に立ってもらって、それに向けて着剣した三八式歩兵銃を突きつける場面、ということですから・・・それをやっていいんだろうか？お客さんが帰っちゃうんじゃないか？・・・という意見などがあって、この場面の表現についてはたいへん悩みました。前回、そんな議論を経て悩みながら、工夫しながらやったわけなのです。

実際に帰ろうとした人がいたのです。しかしその人がなぜ帰らなかったのかというと、私たちの劇場は110名くらいの観客が限度で、その日は観客席が満杯でギュウギュウ詰めだったのです。そのために帰ろうにも通路まで一杯で帰るに帰れなくなって、しょうがないので下を向いたりしながら結局最後まで見ていたということでした。でも、その方は最後まで見てよかった、あのまま帰ったらイヤな気持ちだけ残っただけでしょうね、と仰っていました。そもそもなぜこのようなことが行われたのか。そして心底から悔いて自分が被害を与えた相手の家族に土屋さんが謝罪するシーンがあるのですが、そこまで見て納得がいった、ということでした。帰らないでよかった、と言ってくれました。

私もこの「ある憲兵の記録」を読んで、途中で読めなくなったことがあるのです。てんまつはわかっている、その方が平和のための活動家になったということはわかっているのですが、ここまでひどいことをやった人が本当に変わるのか、変わったとしても罪の償いはそれでいいのかという、自分の中でそんな気持ちが湧いてきてもう読みたくない、という気持ちに私自身も陥りました。



じつはこれを提案したのは、のちに主人公の役を演じることになる護柔一という劇団員です。彼から「もうちょっと読んでみようよ」と言われまして、1ヶ月くらい放っておいたのをまたなんとか読みついだわけです。

途中で投げ出さなくてよかったなあと、今は思います。最後の場面が以下のようにまとめられています。

**戦犯管理所で、人間的な扱いを受けて4年くらい経ったころの話です。**

土屋は突然、胸苦しさに耐えられなくなった。崩れるように腰をついた。驚いて見つめる同僚や劉（管理所の先生）の前で土下座して土屋は叫んだ。

「私は極悪人でした。中国人民に悪いことをしました」・・・「悪いことをしました・・・悪いことを！・・・」膝をついた廊下はひんやりと冷たかった。

土屋は頭を下げて「極悪人でした」と言いつづけました。

涙が流れた。しばらくして、じっと見つめていた劉が言った。「みんなに言いたい、お前の言うことはよくわかった」「立ちなさい」と言った。監守人に促されて立ちあがったとき、中国人にこんなに素直に謝れるなんて、と我と我が身の変化に驚いた。

ここまで読んで、やっと土屋さんの変化を信じられるような気持ちが湧いてきました。でもこの本には撫順戦犯管理所についてあまり詳しくは書かれていません。

ここまで土屋さんが変わった撫順戦犯管理所とはどういうところだったのだろうか、と考えていた時に会ったのが絵鳩毅さんの「撫順戦犯管理所の6年」という冊子です。絵鳩さんは今年3月に101才を迎えられて、奥様ともども茅ヶ崎市内でお元気にお暮らしです。

この冊子を作ったのが松山さんたち、撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部の皆さんです。冊子の最終ページに連絡先がありましたのでさっそく連絡して、何度もいろんなことを教えていただきました。

私は、撫順戦犯管理所のことも何も知らなかったし、山西省で8月15日の敗戦後も山西省で大勢の日本兵が残されて戦争を続けていたという事実や太原戦犯管理所のことも全く知らなかったのです。本当に戦争のことは知らないことばかりだ、ということを経験を書きななかであらためて自覚させられました。

この冊子を読みますと、何よりも日本人に合わせた豊かな食事、健康管理、衛生面、学習、文化活動、映画を見せてくれたり、本を読ませてくれたり、スポーツや音楽活動までさせてくれたということを知りました。そのようななかで土屋さんが変わっていったということが、なるほどそういうことかと腑に落ちるようになってきました。まさに人間として再生していったのだということがわかったのです。「再生の大地」という合唱団があつて撫順のことを歌っているのですが、撫順戦犯管理所はまさに“再生の場”だったのだなあと思います。

そこで演劇ではこの“再生”をどのように表現しているか、ということを経験は劇団からも大勢参加していますのでそれを演じる予定の役者さんにここで朗読していただきます。

紹介します。金源さんという所長がおられました。たいへん親身になって戦犯たちの世話をしてくださった方で、体験者の多くの方が感謝の気持で名前を口にされる方です。その金源さんを彷彿とさせる、戦犯管理所の副所長役を演じる萩坂心一さんと、土屋さん役の護柔一が所用で駆けつけるのが遅くなって

いるので、演出を担当されている藤井康雄さんに渡部役をやっていただきます。

## 本物役者による、マイクなしのド迫力証言！

場面を説明します。1950年にシベリア抑留者のなかから、約1000人の方が中国に送られたわけですが、撫順戦犯管理所に収容されてまだ間もないころの話です。お芝居の場面では“第4場”です。戦犯管理所の催という副所長が、渡部正一を取り調べている場面です。管理所に収容されて半年くらい経ったころです。

では、よろしくをお願いします。

### <第四場 撫順戦犯管理所管理所 会議室>

崔が渡部を取り調べている。

崔： あなたが兵隊だったとき、刺突訓練で殺した人たちは何の罪もない農民たちだったのですね。命令を拒否しようとは思わなかったのですか。

渡部： 命令は、どんな命令でも天皇陛下の命令だ！

崔： 私たちにとって、あなたたちは銃を持った強盗集団でした。

渡部： ソ連の脅威から中国を守り、治安維持のために八路軍を取り締まっただけだ！

崔： 中国はいつ治安維持の援助に来てくれとたのみましたか？

渡部： だから天皇陛下の命令だ・・・。

崔： たのんだことは一度もありません。天皇が中国にしたことは侵略なのです。侵略を忠実に実行したためにあなた方は戦犯となってここにいるのです。

渡部： なんで私が戦犯なんだ！もっと上の者を裁け！

崔： 東条英機のような政府や軍の指導者はごく一部ですが、東京裁判で裁かれました。もちろん、指導者の責任は大きい。でも具体的に実行したあなた方も自分をふり返って考えるべきです。考えてほしいんです。

渡部： あんたらに私を裁く資格があるのか。でっちあげたばかりの共産国をだれが信用するか！

崔： ポツダム宣言を発した連合国の一員としてあなたがた BC 級戦犯裁判をおこなう任にあたっています。あなた方は戦犯として「人道に対する罪」を裁かれようとしています。

渡部： 人道に対する罪・・・？！

崔： 戦争といえども人間がやってはならないことを定めた“人類の知恵”とっていいでしょう。人質の殺害、強姦、拷問、略奪、財産没収、負傷者や捕虜の虐待、無差別な集団逮捕・・・。

渡部： 戦争だ、戦争だったんだ！



崔： 渡部さん。中国は1300万人が犠牲になったのです。あまりにも被害が大きすぎ、まだその全容をつかむこともできません。徹底した被害調査を行っています。あなた方が正直に話すことは、戦争の全容を明らかにすることにつながります。

渡部： いずれ死刑にするつもりなら、速やかに手続きをとってもらいたい！

崔： ……。今日は一先ずここまでにしましょう。

管理所の待遇についてなにか要求はありますか？

渡部： 鉄格子、錠のかかったドア。シベリアでもこんな屈辱はない。

崔： わかりました……。考えてみましょう。他になにかありますか？

渡部： 俺たちは日本人だ。コメを食わせろ！高粱（コウリャン）なんて馬のエサじゃねえか！

崔： ……あなたの要求は上司に伝えます。いろいろご不満がお有りでしょうが、私たちもまだまだ建国の途上にあります。せめてお腹いっぱい食べてもらおうとおもって努力しています。

あまり食事をとっていないと聞いています。必ずとるようにしてください。

はい！ありがとうございました。（超満員の会場で、ド迫力の朗読に一齐に拍手）

まだまだ続くのですが、このあと戦犯管理所の人道的な待遇を受ける中でほかの戦犯たちと一緒にいろいろな変化がおこってきます。そして次は**第9場**、……。この場面は、いよいよ戦犯裁判が近づいた1年くらい前のころです。

渡部がだんだん罪を自覚していく過程で眠れない日も続いてくるし、精神的にももともと頭のいい人ですから追いつめられてくるのですね。そういう中で、渡部と催のある会話が交わされます。では、その部分をお願いします。

## <第九場 撫順戦犯管理所管理所 監房の廊下 1955年ころ>

第九場 途中から

崔： 身体の調子はどうですか？

渡部： 眠れないんです。（……。第4幕とはうって変わって、小さな声で）

崔： （うなずいて）あなたが、食欲もないことや運動や散歩もあまりしていないと看護婦から聞いて心配しています。

渡部： （副所長の目を見て）早く裁判をやって、決着をつけてください。

崔： 日本に帰りたいのですね？

渡部： 帰れません！覚悟しています。

崔： あなたの供述は驚くほど正確です。被害者の名前や場所や時期までほとんど間違いありません。被害者の申し出と、ひとつ一つ一致します。驚きました。

ただ、憲兵の職務は秘密に行われたことがとても多い。

渡部：自分のしてきたこと覚えていることは全部書きました。

崔： あせらないで。あなたが憲兵になってから10数年経っているのです。一挙に供述するなんて無理ですよ。じっくり時間をかけて考えてください。

催、去ろうとする。

渡部：私はなにも、憲兵に・・・なりたくてなったんじゃない。

催、またもどる。

渡部：自分を可愛がってくれた上官が二人も戦死してしまいました。

崔：・・・。

渡部：力もない、俺なんかよりずっと遅れていた奴が特務曹長のもとで俺よりはやく上等兵になった。

崔： 臍肩がないと昇進ができなかったのですね。

渡部：俺は急にむなしくなった。・・・なんのために軍隊に入ったんだ。貧乏人が這い上がっていけるのは軍隊じゃなかったのか！

崔： それで憲兵?!・・・ですか・・・。

渡部： 巡查・憲兵は大嫌いだったのですよ。地主と一緒にになって親父を責め立てた、「借金返せ!」・・・って。

崔：・・・。

渡部： もっと自分の実力を発揮できる職務が欲しかったんだ！自分の力でもっと上まで上がって行きたかった。「申し訳ねえ」って頭下げるだけのオヤジみてえにはなりたくなかった。

崔： あなたが憲兵になったのは、ちょうど中国に対する侵略がどんどん拡大されていった時期でした。あなたの向上心がそれに利用されたんです。

渡部： 向上心？

催、うなずく。

渡部： 私の向上心が人を殺したって言うんですか？

崔： 戦争があなたにそれを望んだのです。

渡部：・・・俺がこの手でやったんだ。やらなくてもすむことをまで。俺がこの手で。

渡部、泣いている。たねの声。

たねの声： 正一。オメエの手は父ちゃんとそっくりだなア。大きくて指が太くてよ。おめえも父ちゃんとそっくりだア。大きくて指が太くてよ。おめえも父ちゃんと同じでちっちゃい頃からよく働いて、働いた手は正直だ。節くれだってて。

渡部： 母ちゃん、俺は、

たねの声： 父ちゃん、乞食がくると土間さ入れて、同じモン食わせて泊めてやってたなあ。

渡部： 俺は自分の食い扶持が減ることばかり気になってよ。

たねの声：おめえはやっぱり父ちゃんの子だな。

渡部：おっかあ、俺は、

崔、渡部に近寄って

崔： 渡部さん。(はじめて名前と呼ぶ) 今、苦しんでいるのはあなただけではありません。先日、クレゾール液をのんで自殺を図った方のことはその後聞いていますか。

渡部、首をふる。

崔： 助かりませんでした。本当に申し訳ないと思っています。皆、自分のやったことを真剣にみつめ、考えようとしています。その結果、追いつめられているのです。死を選ぶほどに。

渡部：・・・。

崔： あなたも、自分が拷問し、殺されていった人々の顔がやっと見えてきたんですね。農民や労働者、彼らにも父親、息子、妻や娘がいたのです。土を耕して米をつくり、眠い目をこすって貧しい暮らしを生きていたのです。あなたと同じ人間だったのです・・・。

渡部：・・・。

崔： 命令でやったのだから自分には責任がない・・・最初は皆、そう言いました。でも、殺された者の目にあなたはどう映ったのでしょうか。それを想像することができるようになったからこそ、あなたは苦しんでいるのです。

渡部さん、この戦犯管理所は過去を裁くためだけのものではありません。未来のためです。二度と戦争を繰り返さないために、私は自分の力をささげようと思っています。

渡部　　・・・。

崔： 実は私は、この近くの平頂山の部落で生まれました。10才のときでした。この地方で活躍していた抗日義勇軍が撫順の日本軍の拠点に攻撃を加えました。義勇軍はすぐに撤退しましたが、日本軍は平頂山一帯の住民は「匪賊に通じている」として、3千人を皆殺しにしたのです。平頂山は、露天掘りの良質な石炭が採れることから、炭鉱労働者とその家族が住んでいました。その日、日本兵がやってきて銃剣を突きつけながら、「写真を撮るから全員広場に集まれ！」というんです。突然、甲高い号令がかかり、一斉に機関銃が火を吹きました。母は弟を抱いたまま、逃げようとして弟もろとも銃弾に撃ち抜かれました。父は横腹を撃たれ、最後の力を振り絞って私の肩をつかみ、私を腹の下に押し込むと動かなくなりました。妹も死にました・・・。死に切れない人は日本軍が銃剣で止めを刺していました。部落の家々は全部焼き払われ、私は家族のなかでたったひとり生き残りました。あなたが憲兵になった、ほんの少し前にこの近くであったことです。ご存知でしたか。

渡部：・・・いいえ。

崔：ここで、あなたたちの世話をしたり、食事をつくったりしている者は、皆、家族や親戚、身近な人々が、侵略の犠牲となった者ばかりです。

渡部：・・・あの、看護婦さんもそうですか。

崔：お兄さんが、日本人憲兵の拷問で亡くなったそうです。

渡部：・・・そうですか。

崔：あなたの罪は重い。しかし、あなたも犠牲者の一人です。天皇の軍隊と侵略戦争があなたを鬼にしました。あなたは生まれた時から鬼ではなかったのです。もう一度自分が生きる意味を考えてください。あなたには故郷と家族があります。すばらしいことです。

渡部、打ちのめされる。

はい！ありがとうございました。（再び拍手）

このような経過がありました。この過程で私は大きなものを学びました。私自身すごい変化がありました。

死刑廃止論、ということがありますね。私はそれにどうしてもそれに与することができない部分があったのです。もし自分の子供や家族が殺されたら、その場合はどうしても死刑にしたい！と願うんじゃないか、でなければ感情が納得できないだろうと思っていました。だけど、この戦犯管理所のことを知って、「死刑」で解決するものはなにもないなあ、解決はつかないんだ、と考え始め



ました。その場合の悲しみを本当に癒すのは死刑によってではないだろう、と。

青少年の犯罪の厳罰化も報道されていますが、それも違うな、と思います。また教育とはなにか、という問いかけもこの撫順戦犯管理所のできごとの中にたくさんあると思います。

何よりも大切なことは、上から押し付けるのではなく本人の自発性を尊重し、それを引き出す。そのために必要な時間をかける、それが本当の教育なんだなということを深く考えさせられ、それを脚本になんとか反映させようと試みてみました。

このようにしてあの戦争の実態、加害の問題について知れば知るほど、なんで自分はいままで知らなかったんだろうと思うのです。今日の資料の中に「父も母も語らなかった戦争」という文書を読んでもらいましたが、私の父も母もどちらかというとな戦争被害者であるわけですね。子供だったり、空襲を受けたり、学童疎開させられたりした経験を私も小さい時から聞いています。しかし、加害の問題というのは深く知ることができなかつたのです。学校でもちゃんと教えないし、本当に伝えていこうという意志がなければ自然には伝わってこな

いものなのですね。それに政府は隠そう隠そうと、一切を隠し通してきています。

今の原発の問題を見ればわかります。今、原発で起こっている真実を国民に知らせない。隠しとおしています。そのこととピッタリ重なる内容だな、と思っています。

初演から再演にかけての変化なのですが、戦争をこれっぽっちも知らない自分のようなものが、例え少しは勉強したとはいえ、書くことが恥ずかしいとかおこがましいという気持ちがどこかにありました。もっと先輩の劇作家には素晴らしい人たちがたくさんおられます。そういう人たちが書くべきなんじゃないか、ということで私のようなものが出る幕ではないのにこんなハメになっちゃったなあと思っていました。

ですが、だんだんと「そうじゃない」と思うようになってきました。年齢の問題ではない。年をとっているからとか、経験をしているからそのことがよくわかっているかどうかということと、深く認識しているかどうかということとは別問題ではないか、と思うようになってきたのです。ですから自分は年齢が下なら下なりにわかるわかり方で、自分の身近な人たちに演劇という形で手堅くとか、共有しあうとか、それを自分なりにやっていいんだな、というように考えるようになりました。そういう意味では今回は自信を持って、指摘される面は本当にたくさんありますが、胸を張ってやろうと思っています。

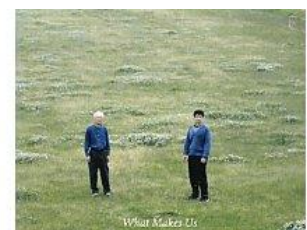
この1年半の変化の中で、土屋さんという人が自分の生涯をきちんと証言して、残すものを残して亡くなられたのはたいへん良かったことでありがたいことなのですが、大事なそれはそれを受け止める側の受け止めがどう受け取るかが大事なんだと思います。

今日の証言集会もそうなのですが、91才の松本さんが相模原からこうして来ていただいて証言していただくのも、聞いてくださる皆さんがいらっしゃるからだと思うのですね。この聞く側と話す側との関係、そのことをもうちょっと深めたいなあと考えてやってきて、まだうまくできていないのですが今回は前回にはいなかった3人の青年が登場し、主人公の話を聞くという設定をしております。

最後に「人のあかし」というタイトルなのですが、これもじつは若松丈太郎さんの詩集に「人のあかし」という作品があるのです。この詩集を私が読んでこのタイトルをいただきました。

この方は福島の南相馬市に住んでおられる方で79才の詩人なのですが、このように詩集のあとがきに書かれています。

**今回の福島原発事故に意味があるとするならば、それは私たちが変わっていくための又とない機会を得たことです。これから来る人たちへの責任を考えた生き方を、全ての私たちが求められているのです。**



若松丈太郎  
あ  
か  
し  
ひ  
と  
の  
ア  
ー  
ト  
ー  
ク

と書かれています。福島原発事故は本当にひどいことばかりですが、もしなにかいいことがあるとすれば、私たちが変わっていくためのまたとない機会だ、と捉えたこのことが本当に素晴らしいと思いました。

この作品のタイトルが最後まで決まらなくてどうしようかとなやんでいたのです。この詩集を読んで、そうだ！「人のあかし」だ！この主人公の語りというものは人としての、人間としてのあかしなんだ、そして私たちが戦犯管理所と触れ合った一つのあかしとして演劇をこんな形につくってみて、気持ちがピッタリ一致しました。

私は思いついてすぐに若松さんに電話しました。出版されたばかりのタイトルを頂いちゃって本当に申し訳ないのですが、このタイトルを使わせていただけないでしょうか、とお願いしました。若松さんは「どうぞ自由にご使用ください」「私は日本語を商品登録しているわけではありません」とおっしゃったのです。・・・こうしてタイトルが決まって、作品も出来上がって上演してもらいようになりました。

そこで最初に紹介した「政府広報」ですね。「だからわたしはわるいにほんじんなの？」「お子さまにどう答えますか？」と問いかけに対する、「そうでない！」「私たちは本当にこの歴史をのりこえていける日本人としてこれから生きていこうとしているんだ」ということをこの演劇を通じて伝えたいと思います。

どうもありがとうございました。

### 「人のあかし2014」公演

協力： 撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部 京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間  
問合わせ：京浜協同劇団 TEL:044-511-4951 HP:<http://keihinkyoudougekidan.com/>  
観劇チケットは予約制です（川崎 / 110 席 横浜 / 200 席）【前売】（当日は各 500 円増）

一般 = 2,900 円 シニア = 2,200 円 (70 歳以上) ユース = 2,000 円  
(30 歳以下) 学生 = 1,500 円

**チケット専用電話：090-1205-4076**

会場：川崎・京浜協同劇団 横浜・神奈川芸術劇場

4月11日（金）川崎 14：00, 19：00 4月12日（土）川崎 14：00

4月13日（日）川崎 14：00

4月25日（金）横浜 19：00 4月26日（土）横浜 14：00, 19：00

4月27日（日）横浜 14：00

詳しくはチラシを参照してください